

続・八犬伝の知論

― 第89回 「毛野の心情吐露」・

150回 「二休の足利義政公教戒」・

167回 「下の下の中後序」をめぐって

井 上 啓 治

続・八犬伝の知論

——第89回「毛野の心情吐露」・150回「一休の足利義政公教戒」・
167回「下の下の中後序」をめぐって

井 上 啓 治

序

I、「妖孽論」における「知論」

II、八犬伝「三つの知論」

III、馬琴の知論の前提「儒学中心・仏学相補の知論」

IV、馬琴の「上知論」

V、考察の総合・まとめ

序

これまで、八犬伝の中に、【少年の成長】と【英雄は仁・知兼備】という二大世界観の存在を指摘してきた。その際、その儒学的出拠を指摘し、儒学理念的と作品的と二つの「意味と理由」を論じ、もって馬琴の構想を考察してきた。江戸後期の壮大なる物語文学の中に、

思想性と芸術的眞実性を見てきたのである。

その際、理想の仁政小王国建国の英雄里見義実・その軍師八郎（伏姫）・八郎の息にして伏姫の許婚者大輔のち、大法師・八犬士の信乃・毛野・親兵衛等、以上の主要人物の行爲が描かれる話説・小世界を通して言表化された芸術性と思想性、具体的には各「物語世界」における説話的典拠、物語性面白さ、人間たちの醜美・性・不思議さ面白さ、（儒学的）理念・哲学を、一体的に指摘・論じ、明らかにしてきた。一体的に考察することで、歴史小説性・大衆文学性・理念思想性の三つの塊と思われる八犬伝の新しい享受・解釈をもたらすことができるかと考えたのである、即ち「八犬伝の世界観」を。具体的には、上記【少年の成長】と【英雄は仁・知兼備】である。

その要は、儒学用語・理念であった。それは、これまで先学によつ

て論じられてきたさまざまな話説、そこに含まれる儒学的理念と出拠を指摘し、儒学理念を用いる意味と理由を明らかにすることであったが、予想以上に多彩多様であった。言うまでもなく、馬琴の四書五経等儒学教養の厚さに圧倒されたのである。

しかし、それを進めることで、以外と思われることに出会った。即ち、「八犬士は賢者」の多出とか、「知」の必須視・重要視、である。実は、この点がもつとも驚いたことであった。「仁」絶対、「仁」の圧倒的優位、と考えていたのが覆された思いであった。そこで、四書五経中心に、儒学的理念と物語世界両者の対象化・論証を集中的に行ったのであるが、やはり「知」が多かったのである。

I、「妖孽論」における「知論」

さて、かつて「知論」を展開した拙稿「八犬伝、毛野・房八の智と〈私情〉」（注1）の末尾に、

八犬伝の知論は右のみではなかった。「後序」の知論に関連して、第九輯下巻の下の乙の上巻、第三部、京師の話説第百五十回、一休和尚による東山殿足利義政公に対する教戒に、注目すべき論が見える。

と記した。また、同「八犬伝の世界観、「知論」をめぐって」（注2）。以下、前稿と呼ぶが、そのI節で、これまでの全ての拙稿八犬伝論の「知論」を総論え総まとめした）において、

そこは徳田武氏「八犬伝」と家斉時代―「隠微」再論―（上）

（下）（注3）で周知のところ、京師の話説の最末尾第百五十回、その前半である。

として、その徳田氏の説を私に、次のようにまとめてみた。「馬琴が毛声山「読三国志法」に三国正閔論と、歴史に託して政治的倫理を正すという小説的原理を学んだ」、例えば、八犬伝当該部で、「悪僧徳用が管領細川政元の乳兄弟で政元の家老香西復六の子であり、政元の養女で病気がちの雪吹姫に、奥女中らに頼まれて加持祈祷を行い、僧侶が権力者と結びつく話柄があるが、これが徳川十一代將軍家斉と愛妾お美代の方、側近の権力者中野石翁、再建された感応寺の住職になった日啓の、事実と噂された話と粗一致する。あるいは、「名画の無瞳の虎精」が足利將軍「義政の奢侈と悪政に対する民衆の反乱の象徴としての意味を担わせられている」が、「これは徳川將軍家斉の奢侈と重ねられて」おり、また「大塩の乱」を寓意していること、あるいは、当時「打ちこわし」における「大入道を伴う前髪・怪力の美少年という、普遍的にさえなつた世直し人の幻像を、逆に叛乱者や妖孽の退治人として親兵衛に重ねた」などと。以上、徳田氏の「政道論」を確認の上で、氏が論じなかつた「知論」について考察したのであった。【一休の足利義政公教戒】の中の「政道論」に続く「妖孽論」のところである。筆者はその前稿において、「妖孽論」の典故『中庸』を指摘し、これが「誠・至誠論」「知・明知論」でもあること、さらに『中庸』当該部前後を検すること、で、「誠論」は即「性（井上注：ものごとの本質のこと）論」で、

これこそ「知論」、「仁知一対兼備こそ人間の理想」なる「中庸」の知論であることを指摘、論じたのであった。そこでさらに、「知論」「誠論」「性論」、「仁・知一対」とくれば、

仁の犬士・知の犬士・「性美しき」とされる親兵衛と毛野に深く関わる。即ち「仁」と「知」、これこそ八犬伝に託した馬琴の理想であり、また親兵衛・毛野に託した【少年の成長・完成】に関わる理念だと考えられるのであるが、続稿で述べることにしたい。

とも記したのであった。

その「知」の重視と「仁・知の一対性」が『論語』の特質であることも拙稿「八犬伝と孝経・論語と史記——第一部里見の聖賢像と『封神演義』太公望像をめぐって」(注4)・「八犬伝第一部、刺客・軍師・聖賢」(注5)あるいは「八犬伝の根底世界」(注6)において見ておいた。また、この「一休和尚による足利義政公教戒」の政道論には「知論」も交えてある、前述「中庸」の知論に拠りつつ論ずる、として問題とすべき箇所を取り上げた。その「一休教戒」の該当部を訳して引く(原文は次節の(3)の①と②)。

(東山殿、前足利將軍八代義政は、珍器奇石、花卉故書画を多
数集め、民を苦しめても尚足りぬと続けて多年、民の怨み積もつ
て、彼の妖艶の童子と変わり無瞳の画虎となつて、世を戒めて
いることを) なおも悟らず、却つて例の童子の出処を気にした
り、妖虎の眼に点じないようにする用心を怠つたことを責める

など、些末のことにばかり囚われているのは、酔いの中の酔いであつて、迷いの上の惑いである。考えてみると、衆生には眼があるといつても、その多くは瞳がないのと同じである。書を見れども文の意味を悟らない、これを文盲もんもウという。玉と石さへも区別できぬ、見てるのに見えない、これらは眼がありながら眼の用をなさないもので、よく考えると皆瞳がない、瞳が無いのはどうしてこの画虎だけであるものか。

ここを、第八十九回の注目すべき場に重なつておいた。

そして、その八十九回こそ、のちの第三部、第六十七回巻頭「第九輯下帙下套之中後序」と並ぶ「八犬伝の知論」(人間の)性さがの美論「誠論」などが言表化された、きわめて注目すべき場であつたと考えている、これら両者とこの第五十回「一休、足利義政批判」における「知論」「性せい」(ここではものごとの本質)論「誠論」が重なると思われるのだが、以下、続稿に期す、としたのであつた。

以上を承けて、本稿ではその「八犬伝の知論」三者をまとめて考察してみた。

II、八犬伝「三つの知論」

早速に、その「馬琴の知論の代表」と思われる第三部第九輯、「下の下の中後序」(第六十七回の巻頭)と、(2)「毛野の物思い・内部世界吐露と馬琴の人性観・学問教育観の代表」と考えられる第八十九回と、この「京師の話説」末部第五十回、(3)「一休和尚に

よる足利將軍義政公批判・教戒」、これら三者の該当部、「知論」に
関わることを比較検討せねばならないであろう。

(1)の「下の下の中後序」は、かつて前掲拙稿「八犬伝、毛野・房
八の智と「私情」」等において馬琴の身上と、心情の吐露にして、
知論と文学論に関する重要な言表だとして論じ、考察してきた。ま
た、第八十九回の(2)は、毛野像・毛野論の核心的言表化がなされて
おり、そこには馬琴の学問・教育観や人性観・人生観等が烈しく示
されているとして、これまで「八犬士論のための序論、毛野の成長」
(注7)・「八犬伝第三部、毛野の成長と完成」(注8)等の拙稿にお
いて何度か論じ、考察してきたところであった。そして、(3)の「一
休和尚の足利義政公批判教戒」こそ、馬琴の知論が直接言表化され
ているとして、ここ何稿かにわたって考察してきたのであった。

さて、まず(1)「下の下の中後序」を引かねばならぬ。冒頭から難
解な文義が続く。私に謂う所の「知論」だと考えている。ここも、
難解過ぎるゆえ、読解されてこなかった、そもそもまともに触れら
れて来なかったところということであろうか。まず原文を引いてか
ら、訳と、解釈を私に加えてみたい。適宜送り仮名を附し、ルビを
附け、段落分けなどをしてみよう。

(1) 智は知る也。 ① 人生まれて耳目の及ぶ所、物として知らざ
るはなし。知るといえども其の理を極めて、是を弁ずるにあら
ざれば、智の要を為さず。 ② 格物致知は、則ち、学者の
先務也。雖然も、是を知る而已にして、慧なき者は悟るに由な

く、才なき者は智を致すこと得ならず。この故に智慧と云い、
才智と云う。】

① 仏説に所云、般若は智慧也。智と慧と具足して、悟るべ
く致すべきを才と云う。智慧も亦た大いなる哉。 ② 蓋し

智と慧と、相佐けて用を做すや、譬えば人の身に魂と魄と有る
が如し。魂は則ち心神也、魄は則ち神系也。人の心の欲する所、
魄の資助にあらざれば、手を動かし足を運ばし、動靜云為、坐
臥行止、一つも其の如意ならず。智慧と才幹と相佐けて、謙く
致すことあるも、是の理りをもて知るべき而已。】

③ 然るに智に上智あり、邪智あり。上智は、良善の事に
用いて、毫も奸悪の事に移らず。進退必ず度に称うて、動く
いへども跌かず。是を賢才睿智という。才は智の乖(乖?)な
る者也。是を以て難しとす。才なく智なきは、則ち下愚なり。】

④ 又邪智は奸悪の事に用いて、仁義の心なく、進むを知り
て退くことを思わず、動くときは人に害あり。奸民盗兇の才あ
るは、多く是なり。

④ 或いは又良知にして心正しく、博く学び得て奇才あれ
ども、命凶にして用いられず、且つ勢利に附かず、富貴を羨ま
ず、同好同志の友稀なれば、但いにしへの聖賢を師とし友とし
て、隱居放言、春日秋夜を長しとせず、常に書を著して、もて
みづから其の智を籠にしぬる者あり。元の羅貫中、清の李笠翁
是に庶しとせんか。是よりの下、唐山にて云う稗官者流、国俗

の云う戯作者是なり。】

実線傍線は、論のきつかけとなる④・⑤・⑥部に附したが、それ以外の所も採り上げることになる。つまり、ここは「知論」の塊、馬琴によって「知論」が集中的に論じられた所であろうか。二重傍線部は、馬琴の内部世界・自評ではないかと考えている。

第八十九回、②は毛野の独白・内部世界を示す極めて重要なところだと考えているが、ここも取り上げられて来なかつたと思われる。ここも、毛野の内部世界・心情吐露と、馬琴の身上・心情吐露が明白に示されていると思われるが、その場面を次に引いてみよう。特に実線・二重線の傍線部が注目される。

②然るにても那の鯉三は、心真実なる今番の挙動、①②世に万卷の書を読むものの、尊大にして世事に疎く、徒だ広博に誇れども、異朝の事のみ細しくして、皇国の故実は夢にも知らず、口に経伝の語句を解けども、心術は一文不通の、俗を去ること遠くもあらずや、その行状を伝え聞けば、慕わしからぬも世にはあらんを、那の鯉三に比れば、実に雲壤の差別あり。

是を思えば ⑦②性の美は、自然の美にして、造らず飾らず、学びて後に才に知る、文字の間になきものにて、至善の人といいつべし。和も漢も、昔も今も、忠臣孝子、義士節婦の、文字なきも多かるは、学ぶに優る世の人の、人の上なる人也けり。然ればとて稟けたる氣質の、其首に至らぬ尋常人は、よく学ば

ずばあるべからず。俺が性は是美ならずとて、④②みづから棄てて学ばずば、愚なるものはいよいよ愚にして、心あれども理義を弁ぜず、眼あれども一書も得読めず、読まざる故に理に疎く、理に疎ければ愆ちを、知るよしなけれど羞じもせず。幸いにして免れて、銭あり勢いありとても、酔えるがごとく生まれ来て、夢のごとくに死なんのみ。

是を思えば ①②その性の、美ならぬものもよく学べば、氣質を更め行いを、新たにしつつ後竟に、稍良善の域に至らん。性の美なるは得がたくとも、その行いの美しきは、学びて得べきものなれば、性相遠し、習えば近し、と孔子のいえるは是なるべし。

俺は一個の師表もなく、纔に自得したりける、文学武芸の人なみなるも、いまだ行う所を得ず、冤家を索ぬる与にのみ、人を集むる坐撃大刀の、長き日消し百轉りて、果敢なき技に辛き世を、渡り鳥なる秋よりぞ、三冬も這里に草枕、旅宿に春を迎えても、這の身ひとつは春ならぬ、心の憂苦を争何はせん。形なき世の去住まい、誠を照らす月も日も、ありとは見えて景足らぬ、胸の有想無想、千早振る、神は知るや、

ここは、かつて拙稿「八犬伝、毛野の〈智〉と人性観・教育観」（注9）や注1論文等で採り上げ、考察した所である。ただし、「馬琴の人性（人間のさが、人間の生まれつきの本質）観・学問教育観・人生観」を中心に論じたのであった。その際、『論語』『中庸』等に

捭り、「誠」^{せい}「性」(ものごとの本質)を中心に、「知」についても考察した。

そして、この第百五十回、(3)「一休和尚、東山殿足利義政公批判教戒」の該当部を引かねばならないのだが、それは前稿において、「政道論」の部分と「知論」の部分に分けて指摘するために、紹介のみしておいたところであった。「政道論」については、前稿で紹介した如く、徳田氏が詳細に論じられていた。ならば、今ここで、「知論」の方を論ぜねばなるまい。

そこで、上引両者、第百六十七回巻頭の「馬琴の知論の代表」たる(1)「下の下の中後序」・(2)「毛野の内部世界吐露と馬琴の人性観学問教育観の代表」たる第八十九回、この両者と比較検討するために、(3)を再度、段落附けた形で紹介することにした。

(3)①珍器奇石、花卉故書画を、多く集合て民を傷むるを、尚飽かず思召すこと、既に年来になるをもて、民の怨みと鬼神の怒りの、ようやくに相纏りて、那の妖艶の行童にvari、又無瞳の画虎と見れて、世を箴め人を驚かしたりける

②を、尚眺得給わずして、反つて那の行童の出処を訝り、且つ虎の眼に点せざりける、用心を詰り給うは、酔いの中なる酔いにして、迷うが上の惑い也。夫れれば、一切衆生の眼あるも、多くは瞳なきが如し。ここをもて、③書を見れども、文義を悟らず、是を名つけて文盲と云う。甚だしきに至りては、一字

不通の無筆あり。是より下は、玉と石と、菽と麦とを分別せず、視れども見えず、指せども知らず。是等は眼ありながら、眼の用を做さざる者にて、よく思へば皆瞳子なし。豈に只この画虎のみならんや。

③この故に内典に、般若をもて菩提の一義とす。④般若は即ち大智慧也。智はおのづからに知る義にて、慧は即ち悟るの義也。

④また外典子狗に、無明の酔いの醒めざるを、蒙々として未まだ見ざる、狗子の如し、といへるも是なり。

⑤君は俗に云う物数奇にて、新奇を好み給へり。且つ珍器故物の御鑑定に、御眼力は富み給へども、民の憂いの見え給わぬに、瞳なき画の虎をのみ、怪しみ給うは是も亦た、御惑いに候わずや。

⑥余るに這の無瞳の画虎に、人其の眼に点せしより、忽地に暴れ出でて、世の人を恐嚇せしを、よく思へば相似たる事あり。

譬えば、③本性奸佞にて、且つ邪智ある者、或は亦た ①庸才なるも、憍いに漢字びして、眼其の用を做すときは、心高慢り己に惚れて、博きに誇り俗を欺き、利を尋ね名を鬻ぎて、反つて身を脩め心を正しくし、家を成し、道を行う、真の学問には疎かにて、只世俗を非とし賤しめて、身は是魔界に在るを思はず、甚だしきに至りては、乱を起こして刑せられ、衆と争うて兵せらる。かくの如き白物の、悪名を貽すが如きは、瞳子

なかりし這の虎の、眼に点して遂に那の禍事を惹き出だせしと、亦た年を同じくして論ずべし。嗚呼造化の小児の手段玄妙、禎祥も徒に興らず、妖孽も徒に起こらず。事勸懲に係る所、誰か這の深き意を知らんや。是に由りてこれを観れば、這の虎実に巨勢金岡の肉筆なるや、神明仏陀の灵画なるか、人も得知らず、我も得知らず。知らぬを強いて説を做して、原故を究めんと欲するは、是惑いのみ。蓋し虎の猛悪なるも、瞳なければ、人を傷らず。⑦3人の性の美しからぬも、見ず知らざれば、倒かに易かり。然れば瞽者は、反つて具眼の俗に勝りて、富戸あり、博識ありて、家を興すも尠からず。眼目の資助は、人によるべし。

⑦君果たして、妖艶の行童の出処と、無瞳子の虎の画工の用心を、知らまく思召すならば、君が年来の御行状を、省み給うにしくことなし。疑い給うことかは、と席を拍ち面を犯して、忌み憚る所なく、談義数刻に及びしかば、義政公は愕然と、酔えるが如く醒むるが如く、且つ怒り且つ羞じて、黙然たること半响許り、

以上が第百五十回、(3)「一休和尚、義政公批判」の該当部である。問題とすべき個所に、それぞれ傍線を附した。文辞、キイワードが前二者(1)(2)の傍線部と直接的に一致、もしくは粗々一致ないし類似する所、あるいは行文の内容が一致または類似する所に行なった。前稿において、「政治政道論の場合と思われよう。だが、ここには」知

論」も交えてあった。②③⑥を中心に、前述「『中庸』の知論」に拠りつつ論ずることになるうか」とした通り、その三か所であった。そこで、三者の該当傍線部を一つずつ論じ、その上で考察を加えてみよう。

Ⅲ、馬琴の知論の前提「儒学中心・仏学相補の知論」

まず傍線部③だが、この第百五十回(3)「一休和尚の足利義政公批判・教戒」(以下、「一休教戒」と略す)では、京師を騒がした古画の妖虎に関する問答、それを承けた「国家将に興らんとすれば、禎祥あり、国家将に亡びんとすれば、妖孽あり」(前稿注2論文で、先に記した如く、この出典を『中庸』と指摘し、論じておいた)の箴言を示す。それに続けて中国近世初期、芸術芸能を事として佞人に政を預け、民を傷つけ国家を亡ぼし、はるか北方、嚴寒の金国に親子・宮廷夫人・女官達とともに連れ去られた北宋末期の亡国の皇帝徽宗を採りあげ、そこでも宮中に妖孽が出現したことを述べ、目前本朝京師の無瞳の画虎妖も同じと断じた後、「よく御心を、推し鎮めて聞し召せ」と、直接眼前の義政公に向かって政道批判・義政公教戒を行うのであった。そして、前引の通り①⑦へと続くのである。その②にある傍線部③を、私に釈す。

書・文字を見ても目に入るだけで、意味も分からぬ、これを文盲というが、その中には一字さえも読めぬ分からぬ無筆もある。それ以下というと、玉と石、豆と麦さえ区別できないということ。

つまり、眼には入っても見えてない何も分かってないということ。即ち、眼があっても用をなしてない者である（よくよく考えると、皆瞳がないに等しいということ、瞳がないのはどうしてこの画虎妖だけであるものか、と続く）。

これは知論のための入り口であろうか、次の③にある傍線部③3の、「だから仏説では般若は大智慧のことで、智はおのづからに知ること、慧は悟ることである」という難文、「知論」に関わるきわめて難解な文に続くのである。

この③が対応すると思われる第六十七回巻頭、(1)「第九輯下帙下套之中後序」(以下、「下の下の中後序」と略す)の傍線部①1になると、冒頭の書き出し「智は知る也」に始まって、同じく私に積すと、

人は聞こえ見える範囲に関しては、その物について知っているといえるが、それは耳に入り目に入ったというだけで、知っているといっても、その理を明らかにしてそれを明晰に述べることができなければ、「智」の根本を押さえたことにならない

となる。では、上引両者のだいたい以前にあたる第八十九回、(2)「毛野の独白・内部世界、馬琴の学問教育観・人性観」(以下、「毛野の独白」と略す)で対応する傍線部②2では、一体どのように言表化されているだろうか。傍線部①2と⑦2の後、①2の前である。同様に、私に積す。

自ら諦め放棄して学ぼうとしないと、愚かな者はいよいよ愚かなままで、心はあっても道理や善悪を明らかにすることができず、眼があっても一書も読むことができない。読まないから道理が分からず、道理に暗いので過ちを知ることができず、知らなくとも差もしない。

となる。

③3・①1・②2の三者に関する考察のまとめとしては、三者三様といえは三様であろうが、基本は同じ、「知論」の入り口、ということになるか。誰しも、見ている聞こえているといっても、なんとなく、そのもの事を知っている・認知識別しているだけで、その理や本質に関する深い認識・理解は、まったくできていない。つまり、眼があっても目に入ってくるだけで、まったく用をなしていない、「根本的に知った」ことにならない、ということ。やはり、「知論」のための導入部、ということであろう。ただし、(2)の②2では、「性論」や「馬琴の学問・教育観」も含まれているため、馬琴の想い・烈しさもおのずから言表化され、強くにじみ出ている。

問題は、(1)の①1の後ろ、「格物致知は」で始まる短文①1で、「慧・悟る・才・智を致す・智慧・才智」を含んでいる「儒学・仏学混交」の難文である。そのまま「仏説」を中心とした①1に続き、「般若・智慧・智・慧・悟る・致す・才」が示され、同じく②2「智と慧」即「魂・魄」論となるきわめて文義の難い説が続く。そして儒学理

念に移り、㊦3「然るに智に上智あり、邪智あり。上智は………才なく智なきは、則ち下愚なり。」と「上知論」が示された後、㊦1「邪智論」に続き、最後に㊦4「或いは又良知にして心正しく………稗官者流、国俗の云う戯作者是なり。」という、必ずや馬琴の自評・自負を含んでいるであろう「誠論」「性の美論」そして日中作家論で終える。この最後の㊦3・㊦1・㊦4こそ、おそらく己を顧みた「馬琴の知論の核心」と思われるのである（Ⅳ節で、㊦1・㊦3を考察する）。

思えばこの(1)は、大部大河の八犬伝に終末・結局部が見えてきた第百六十七回巻頭に、あえて「智」に集中した形で、明白に示された、まとまったところであった。やはり、意識して示された「馬琴の知論」であったことが確認できよう。本稿ですべてを論じることができぬゆえ、各節毎に必要なに応じて採り上げ（Ⅳ節で、㊦1・㊦3・㊦1を論ずる）、考察するにとどめ、残りは続稿に期すことにしたい。

さて、その上記㊦1を含む傍線部㊦である。

(1)「下の下の中後序」の傍線部㊦1は、きわめて難解である。これまで、八犬伝の「知論」を論ずるために四書五経（ただし『易経』は用いていない）や『孝経』等の用語・考えを用いて解釈してきた。ここも難解だが、これまでの論考で種々に用い、また私に解釈してきた「『中庸』の知論」、さらに今回は「『大学』の知論」を、特に

前稿で論述したものを中心にここでも頼ることにしよう。既に、一々は引かない。さて、㊦1、

仏説で言うところの般若は智慧ということ。智と慧と両方を完備することが大事で、完備した上で、慧があるから真理をきわめ真実を悟ることができるし、智を致す、智をきわめることができるように働くことができる、その働きを才というのである。（儒学の「智」に対して）仏説の智慧というものもまた偉大なるものだよ。

このように釈してみた。ところで、上述した如く、この前後にさらにきわめて難解な文が備わる。この前後㊦1・㊦2と㊦1と三者併せた知論を、解釈せねばなるまい。何故ならば、その直後に、㊦3、

然るに智に上智あり、邪智あり。上智は、良善の事に用いて、毫も奸悪の事に移らず。進退必ず度に称うて、動くといへども
跌かず。

云々なる「上知論」と「良善」があるゆえである。「上知」は、毛野論にとって必須と考えているからであるが、第Ⅳ節でいくらか触れる。さらに、㊦1「邪智論」を経て、その後ろに続くのが、馬琴みずから語ると思われる「良知の自評」だからである。

また、「良善」だが、「三つの良善」として拙稿注1論文「八犬伝、毛野・房八の智と（私情）」で考察しておいた。

さて、㊦1に対応するものは、(2)「毛野の独白」第八十九回には

ない。つまり、②2はない。だが、第百五十回、(3)「一休教戒」には、前引③3があった。④3の直後である。釈すと、

仏説に、般若とは大智慧のことで、智は自然とものごとを識別認識する力、慧は即ち真実真理をきわめる力悟る力である。

とでもなるうか。非常に重要な言説で、「儒学中心・仏学相補」とでもいうべきと思われる「馬琴の知論」の前提であると考えられる。ここでは、仏教の「悟る」を儒学の「致知（深遠なる真理・本質をきわめること・力）」にあてはめて考えてみたのである。それが可能であった、そのアナロジーに妥当性があったということである。この点と、「馬琴の知論」の前提の二点を確認できたことが収穫と思われる。

②1・③3の②に関する考察のまとめとしては、「仏説における知論」、その要約を示したものとすることができよう。次IV節で触れる。

IV、馬琴の「上知論」

③に移る。百六十七回、(1)「下の下の中後序」の傍線部③1、

又邪智は奸悪の事に用いて、仁義の心なく、進むを知りて退くことを思わず、動くときは人に害あり。奸民盗児の才あるは、多く是なり。

短文だが、真ん中の傍線部「進むを知りて退くことを思わず、動くときは人に害あり」が難しい。儒学的に、どう考えたらいいかのか、

ということなのだが。ところで、この一文はこの直前にある次の一文、④3と対になっている。

然るに智に上智あり、邪智あり。上智は、良善の事に用いて、毫も奸悪の事に移らず。進退必ず度に称うて、動くといえども 跌かず。是を賢才睿智という。才は智の乖(垂?)なる者也。是を以て難しとす。才なく智なきは、則ち下愚なり。

両傍線部については拙稿注1論文「八犬伝、毛野・房八の智と(私情)」で考察した。ここでは、第一部前半「建国譚(サーガ)」における里見と軍師八郎と、第二部における毛野三者の「智」を比較したのであった。ここでは、両者の類似性を採りあげてみたいのであるが、ここもきわめて難解であり、量を要するゆえ次稿に回すことにしよう。ここでは、破線部のみ考察することにした。

難問は「才は智の乖なる者也」であろう。「乖」は「乖離」の乖で、「背く」等で意味が通じない。そこで、きわめてよく似た「垂すい」の誤字誤刻ではないかと想像した。もし、そうとすれば、「垂すい」で、「垂すい・たれる・ほとり」で、「才とは、智の垂なり」ということになるう。すると、「智とは何か」、「才とは何か」、これらについていねいに論ぜねばならなくなるう。

「智」「才」「慧」「悟る」「上智」「邪智」の六者について、集中的に記されている(1)(A1・X1・B1・X2・X3・C1・X4)を検討し、「知論」の根本的な基礎である「智」と「才」を、ここで改めて考察してみよう。これまでは、種々の「知論」の考察から、

「智」を「深遠なる認識・本質に至ることではないが、ものごとを識別分析認識する識別智・分析智・認識智」とでもいうべきものと考えており、そのように用いてきたのだが。さて、①I、

智は知ること、眼に入れば知る、識別認識すること、しかし、その真理道理を正し究めて、明らかに述べることができないように、智の根本に至ったことにはならない、

となろう。次いで、①I、

格物致知というが、知るのみ、識別するのみで慧の無い者は悟るためのその力・方法も無く、才の無い者は智を致すこと、つまり才の無い者は深遠なる真理・本質を究めて手に入れることはできない。「致智・悟る」、ということが重要なので、それに必要なものということで、仏説でも「智慧」と言い、「才智」と言うのである、

と。本源的本質的な「致智」と「悟る」に対して、「才」と「慧」が伴うべきことであろう、しかも必須であると。

また、①Iの仏説だが、「致すべきを才と云う」の「べき」を、「致すべきことを」と、「致すべきものを」の両方が考えられるが、「致すべきことを」だと、「智と慧とが完備し揃って、悟ることができるように正し究めること自体を才という」となって、通じにくい。そこで、「致すべきもの」とすると、「智と慧と揃って、悟ることができるように正し究めるその働き・用を才というのである」となっており、前者よりは通じやすい。

以上三者をまとめると、何が分らうか。まず、①I「智は認知識別すること」。①I「才の無い者は智を致すことはできない。つまり、才は致智に必要」。②I「才は致智＝悟るための働き」。

Ⅲ節同様、儒学の「致智」を仏学の「悟る」と道義と類推したのである。もし、そうとすれば、「才はものごとの深遠なる真理・本質を手に入れんとして、智を究める時に必要な働き・方法・技術など」と考えられようか。

さて、「智」と「才」を考察したゆえ、①Iと②Iになっている③Iの破線部、「才は智の垂なる者」に反映させよう。すると、「才は智の傍らにあつて、智を究めるのに必要な働き・方法など」と結論付けることができようか。もしそうとすれば、③Iは、要点のみ言うと、

ところが、智には上智もあれば、邪智もある。上智の人は、出处進退・行動が必ず基準に適っていて失敗しない。これを賢才叡智というが、その才というのは智を究めるのに必要な働き・方法である。(智だけでは駄目で、才がないと深遠なる本質・真理には至らない)、(だから、上智になる、上智であることは)難しいというのもこの故である。(逆に、智だけでも、才だけでも、手に入れたものだが)才も智もない者は、下愚である、

ということになるか。これを、「上智・賢才叡智論」として、記憶しておきたい。毛野は最高級の智、即、「生知」である。そして、

「上知」であった。その「上知」に関する馬琴の理解・認識が明らかになった、といえるだろう。

さて、①と対の③の考察を半ば終え、半ばは後考に残したが、馬琴の「上知論」を明らかにするという大きな収穫があった。②はない。八十九回(2)「毛野の独白」に③は触れられていない。百五十回(3)「一休教戒」には、③「本性奸佞にて、且つ邪智ある者」としかない。

①・③の③に関する考察のまとめとしては、上述「馬琴の上知論」と「邪智は奸悪の一言」に尽きよう。

次いで①であるが、百六十七回、(1)「下の下の中後序」にはない。百五十回、(3)「一休教戒」の③を引く。

庸才なるも、^{なまじ}愍いに漢学して、眼其の用を做すときは、心高慢り己に惚れて、博きに誇り俗を欺き、利を尋ね名を響ぎて、反つて身を脩め心を正しくし、家を成し、道を行ふ、真の学問には疎かにて、只世俗を非とし賤しめて、身は是れ魔界に在るを思わず。

この「愍いに漢学して」に注目して、徳田氏が「大塩の乱」の寓意を指摘されたことは、前稿で示しておいた。さて、この③は一休を超えて、実に馬琴らしい慷慨であろう。釈してみよう。

持つて生まれた才能は凡庸な者が、できもしないのになまじつか漢学を学び、一応眼がその用を果たして深い認識・心理には到達

しなくとも表面的な知識・識別認識には至り、そのため心昂ぶり高慢傲慢の自惚れとなつて、智識だけは博学になつたことを誇つて大衆を欺き、利を求め名を売ることに夢中になり、反つて、真の学問、つまり身を修め心を正しくして、家を斉え、正しい道を行ふ真の学問は疎かにして、そのくせ、ただひたすらに世間の人々を批判非難し賤しめて、己自身が心身墮落し尽して身は魔界にあることを認識していない。

ここには、重要な言説がある、と思われるのだが、それは続稿で論ずることにしたい。

さて、これに対応するものは、八十九回、(2)「毛野の独白」にあつた。①②を引く。

(然るにても那の鯽三は、心真実なる今番の挙動、)世に万卷の書を読むものの、尊大にして世事に疎く、徒だ広博に誇れども、異朝の事のみ細しくして、皇国の故実は夢にも知らず、口に経伝の語句を解けども、心術は一文不通の、俗を去ること遠くもあらずや、(……那の鯽三に比ぶれば、実に雲壤の差別あり。)

釈すと以下にならうか。

(それにしてもあの鯽三の心深い誠心な今回の行動であつたことよ。)世間には万卷の書を読んでも、尊大高慢だけで世間の実事はまったく知らず、ただ知識だけは博学になつたことを

誇ってはいるが、他国（中国）の文化・歴史にのみ詳しくなっても、自身の生まれ、住む本朝日本の故実、制度・文化などはちつとも知らず、口には儒学の文句を説くが、心ざま心ばえ・深い美や真実は何一つ分かつてはいない、俗を去るところか俗中の俗、（……あの鯽三に比べれば、まことに天と地ほどの違いがある。）

前者①③同様に、毛野を超えて、徹底して馬琴らしい公憤・慷慨の気があふれている。これら①に関する考察のまとめとしては、共に似非学究・村学究を口をきわめて非難批判していること、粗それに尽きるといえよう。ただ、①③で、「学問した時に、目がその用をなした時は、高慢博学になる」というようなことを言っているのが注目される。「ものを見て知ってはいっても分かつていない。」という①に同じであろう。知識人論のようであり、やはり知論でもあったのだ。

V、考察の総合・まとめ

知論が集中して示されていた八犬伝の三か所を、多くを残しつつ、半ばを考察してきた。半ば、というのは、(1)の八犬伝第三部、第九輯第六十七回巻頭の「下の下の中後序」の該当部の全てが、それぞれ難解な知論の塊と思われるゆえ、本稿では各節の注目点問題点毎に採り上げて考察し、全体を集中的に採り上げることが続稿に期待したゆえである。それでも、いくらか「八犬伝の知論」に関して収

穫があった。

①類は、いずれも「知論の導入部」であったが、百六十七回の(1)「下の下の中後序」が、「意識的に集中して示された馬琴の知論」で「儒学中心・仏学相補」であることを確認できたことが収穫である。

②類は、「仏説の知論」で、やはり「馬琴の知論の前提である儒学中心・仏学相補」と、「致智⇨悟る」とアナロジカルに考えられることの確認と、「智・慧・才」の意味の考察・確認が収穫であった。

③類は、やはり「儒仏混交の馬琴の知論」と「智と才」の考察と、「馬琴の上知論」の考察・確認という大きな収穫があった。

以上、これまで、拙稿注9論文等で聖賢里見論・毛野論として考察してきた『論語』の「仁・知一対性」や「三知一愚論」、孔子の後学子思学派の『中庸』の「三知三行論」や「好学・力行・知恥と知・仁・勇の三徳論」、あるいは私に謂う「毛野即生知・上知論」などに、「馬琴の知論」の基礎的視点を付与することができたのではないかと考えている。

注

- 1 『就実論叢』37号、平20・2。
- 2 『就実表現文化』8、平26・1。
- 3 『文学』、昭56・7、及び翌8。
- 4 『復興する八犬伝』、高田衛・諏訪春雄氏編、勉誠出版、平20・2。
- 5 『就実表現文化』1（通巻27）、平18・12。

9	8	7	6
『就実表現文化』	『就実論叢』	『就実表現文化』	『就実論叢』
2、平19・12。	38、平21・2。	3、平20・12。	36、平19・2。